

令和6年度第1回香川県立図書館協議会 議事録

日 時：令和6年7月18日（木） 13:30～15:00

場 所：香川県立図書館 研修室

出席者：梅澤委員、川根委員、河野委員、清國委員、前田委員、宮脇委員

欠席者：池田委員、黒川委員、平田委員、山本委員

傍聴者：なし

1. 開会

2. 館長挨拶

3. 議題

(1) 令和5年度運営状況について

- ・事務局から説明
- ・質疑
- ・承認

(2) 令和5年度図書館評価について

- ・事務局から説明
- ・質疑
- ・承認

※ それぞれの議題に関する質疑については次のとおり

議題(1) 令和5年度運営状況について

委員：資料1 ページの入館者数と個人貸出冊数のところを見比べると、来館者数は前年度と変わっていないのに、貸出冊数は約6万冊減っている。このことについてどう分析しているのか。

事務局：コロナを境にして、図書館の利用の形が少し変わったことを反映しているのではないかと分析している。デジタル社会の進展と新しい生活様式の定着などを要因として、貸出冊数が減少しているのではないかと分析している。

委員：書籍とか雑誌とかも確かにデジタルとかサブスクリプションで読むことができる。新聞等もデジタル化しているし、そういう変化が起きているのは確かに事実である。それがまた図書館の役割というところにどう関わっていくのか。それを受けとめて、どういうふうに図書館として変わるのかが、今後問われるということだろう。

事務局：高齢化とか人口減少ということも要因としてあるけれども、この減り具合からすると、それだけでは説明がつかないと思っている。コロナ禍を経た生活習慣の変化、つまり習慣として図書館に来ていた方が来なくなったのかもしれない。やはり簡単な情報であれば、もう紙の本に当たらなくても、インターネットで手に入る時代が来ている。そういったところが利用者数や貸出冊数というところに表れてきていると感じている。

委員：高松市には中央図書館とそれ以外の地域館がある。高松市図書館全体あるいは高松市中央図書館としても、県立図書館と同様に、利用者数や貸出冊数が減少している。やはりコロナ禍を受けて、それまで図書館に通っていた方が一旦ストップしたので、また戻ってくるには少し時間がかかるというか、もう新しい生活スタイルになってきているから、結構厳しい状況だと思っている。中央図書館だけで令和5年度の貸出冊数は令和4年度との比較で6%減となっており、県立図書館とほぼ同じような状況である。

まずは、その貸出冊数を何とかしたいということで、子どもを対象に絞り取り組んでいる。子どもにとって読書は想像力を豊かにしたり、感性を磨いたりとか、いろいろな効用がある。高松市には20名以上の団体が登録さえすれば1月間150冊を貸し出す団体貸出制度がある。こども食堂や子育て支援施設、児童デイサービスなど160近くの団体に対して、市図書館の団体貸出制度を案内したところ、新たに11団体ほどが団体貸出の登録手続きをしてくれた。概算だが11団体×150冊×12月で2万冊の貸出しを見込んでおり、そういう形で子どもを対象にした取組みの強化に努めている。

ただ、利用者数と貸出冊数という、よく言われるその2つの指標だけで、これからの図書館を考えていくのは苦しいのではないかと。地域への貢献度とか、何らかの新しい視点、新しい指標があればいいのかなと考えている。

委員：私自身も図書館を利用していないのが現状で、20年ぶりにこちらの図書館を訪れた。社会人になってからの図書館の利用目的は資料集めということだったが、現在はこれほどインターネットが発達しているので、図書館まで来なくても職場のパソコンで全部調べられる。それがこの数字に反映されているのかというと、入館者は増えている。でもその人たちが何をしているかというのが、この数字ではちょっとわからない。貸出冊数は減っているが、入館者は増えているというのは、やっぱりインターネット利用の方が増えたという理解なのか。それとも、家族が大勢で来て子ども1人が借りているということなのか。入館者は付添いの大人を

含んだ人数ということでよいのか。増えているけれど減っているということは、そういう意味合いでよいのか。

事務局：インターネット利用目的の来館者が増えた訳ではないと思う。本当にコロナが吹き荒れていた頃の統計では、入館者数が激減したけれども、意外に貸出冊数は減らなかったということがあった。それはたぶん、何度も来られないから、来たときにたくさん借りる人がいたのだろうと思われる。今は真逆の状態なので、来館する人全てが本を借りて帰る訳ではない、もしくは1回に借りる本の数が減っているという風に考えるしかない。

委員：皆さん一度に10冊単位ぐらいで借りて帰るのか。1冊ということはまずないと思うが。

事務局：利用者によって異なるものと思われる。当館は一度に1人10冊借りられるが、例えば、児童資料の絵本などは、家族分のカードを合わせて30冊、40冊借りる方もいるし、定期的に来館できる方であれば、その期間に読める冊数だけ借りる方もいる。それぞれの読書習慣によって借り方も異なる。

委員：イベント参加者も入館者数に含まれているのか。

事務局：入館者の計数機は閲覧室入口に設置されているので、例えば視聴覚ホールで行う音楽会のような催しの参加者は含まれない。もちろんコンサートが終わった後に閲覧室まで足を運んだ方については入館者としてカウントされるので、なるべく閲覧室の利用に結びつくよう、コンサート会場で演奏曲のテーマに関連する資料を紹介するなど、それぞれのイベントが最終的に図書館利用や読書に結びつくような工夫はいろいろ行っているが、なかなか効を奏していない。

委員：美術館などでも最近ロビーコンサートとかをきっかけに来館してもらい、美術作品を見てもらおうという取組みが増えている。図書館ももっといろいろなイベントに取り組みれば、新聞紙上でお知らせできるので、開催についての情報提供をお願いしたい。

委員：いろいろな事業を展開していて、図書館を知ってもらったり、足を運んでもらったりということに努めており、図書資料の利用ではないところでもすごく頑張っている。例えば、「子育て支援講座」は市町村立図書館なら公民館等と連携しながら開催する例もあると思うが、県立図書館での取組みは少ないと思う。

委員：私も企画担当部署にいたことがあるが、企画するのはなかなか難しい。県立図書館では様々なことをしているので、努力していると思う。この前も「カンヅメをつくって学ぼう！」というイベントのチラシを送ってもらったが、なかなか面白いし頑張っていると思う。

議題(2) 令和5年度図書館評価について

委員：評価指標①の蔵書冊数は、収集した冊数から廃棄した冊数を差し引いたもので、1年間でどのくらい廃棄されたか分からないが、貸し出した本の扱いが丁寧だったり、丁寧でなかったりすることによって影響される。図書館側が悪いわけではなくて、破れるなどして廃棄せざるを得ないということなので、達成率を99.9%としているが、ほぼ100%という気がする。

委員：達成率として数字が出る以上、0.1%の違いで評価がAからBになることも致し方ないところがある。

ただ、蔵書の冊数は予算によって制約されるし、或いは本の単価によって冊数が決定されるという面もある。単純に数値目標を超えれば良いのなら、安い本をたくさん買えばいいことになるが、そういう話ではない。資料的な価値に基づいて、それを検討して購入しているので、冊数で評価するところに若干無理があるという気はする。

委員：購入する本を決めるときには、どういう基準で決めているのか。

事務局：資料の選定については、児童、郷土、一般などの部門別に選書の担当者がいて、ヤングジェネレーションや子育てなどの展示コーナーごとにも担当者がいるので、その者が選書する。

基本は「香川県立図書館資料収集方針」に沿ったものということになっている。当館の場合、見計らいという形で現物を持ってきてもらって、手に取って見ている。もちろん出版された全ての本が届くわけではないので、あとは出版物を紹介している『全点案内』というカタログみたいなものがあるので、そういうものを使って選定している。

今のところ、資料費が潤沢にあるわけではないので、重点的に郷土資料だとか児童書だとか、課題解決用の本とかを重点的に購入し、いわゆる娯楽書というか、読み物とか実用書的なものは少し控えるという運用をしている。

また新聞の書評などで紹介されたものとか、受賞作品とか、そういうものは購入するという感じで選書している。

委員：図書館資料の整備充実のうち計画指標①「蔵書冊数」が達成率 99.9%でB評価になっているが、普通に計算すれば小数第2位を四捨五入し100%になると思うのでA評価で良いのではないか。それとも四捨五入ではなく、厳密に数値目標を満たしていなければ99.9%ということになるのか。

事務局：そこは私どものやり方の問題かもしれないが、いたずらに達成率ありきで事業が引っ張られることがないようにということは意識している。

委員：数字では測れない努力をしていると思う。読んだ本を記録できる読書通帳は、自分が借りた本が通帳に残るとするのは子どもにとってすごく楽しいと思う。自分の子どもがもう少し小さいときに、図書館にたくさん連れてきたらよかったなと思う。

今私が携わっている公民館にも図書室があり、毎年、本を購入している。新しく本が入ると公民館報に載せて、地域の方が借りに来る。地域の方が「この本買って」と新聞の切り抜きを持って来たりしてリクエストをもらったら、その本を購入しその方に連絡している。

もっと子どもの数が多かったときは、児童館が隣にあるので、毎週木曜日は公民館に児童館の子どもが先生と一緒に来て、本を借りて帰っていた。その頃は子ども用の図書をたくさん買って、子どもたちが毎週1冊か2冊本を借りて帰っていた。現在は、児童の減少と児童館との兼ね合いというか、もうそういう交流もなくなってしまい、子どもの利用が減ってしまった。逆に高齢者の方が町の図書館まで行くのがしんどいから、地域の公民館に来て5冊ぐらい借りる。貸出期間は特に設けていないので、ゆっくり読んでもらって、「どうでしたか」って声を掛けると、「この前借りた本と同じ本やったわ」とかね、「そうなんですか」って言いながらも、ちょっと会話をしている。でもやっぱり本に触れるのが好きな方はたくさんいる。こちらのような大きな施設なら、より多くの方が利用すると思うので、皆さん、すごく努力していて、頭が下がる。

委員：A評価の指標とB評価の指標があるが、全体的にAではないか。本当に皆さんの努力でこういう結果になっていると思う。

いろいろなイベントにとっても興味があるけれど、なかなか参加できず申し訳ない。イベントに参加された方々の意見を聴く簡単なアンケートを取ったりしているのか。音楽会は毎年引き受けてくれるアーティストがいるのか。

事務局：参加者のアンケートについては、取っているイベントと取っていないイベントがある。例えば「子どものためのとしょかんコンサート」など多人数が入場するようなものに関してはアンケートを取っていない。写真の2ページにある「すこやか生活応援講座」とか「子どもの本と読書の講座」などに関しては帰り際にアンケートや感想を書いてもらっている。職員研修会など机に着席する形の催しは、チャンスがあるので書いてもらっている。

コンサートの出演者はお願いしたら快く引き受けていただいでいて、今年度も「やっている私らも楽しいです。」と仰ってくださった。あと「あなたもアーティスト！」は、中学校の美術部さんが活動する場所が欲しいということで、大変積極的に好意的に引き受けてくださっている。

企画する側としては、特に「こども読書まつり」は、毎年同じ内容だと飽きられるかなと思いき、3年とか5年とかのスパンで少し違うものになっている。「高校生のための一日司書体験」は昨年度初めて実施した。それまでは高校生の読み聞かせ講座をしていたが、年数も経過したので、違うものに変えてみようと思った。

事務局：各評価指標に関しては、これが令和5年度までの評価指標であり、これらの指標ごとに設定した数値目標により運営状況の評価を確定させるが、令和6年度は研修会参加者の満足度を評価指標として用いるなど見直しを行っている。

委員：この図書館評価は毎年悩ましいところがある。A評価とB評価ならAのほうがいいだろうと思ってしまうが、本当にAのほうがいいのか。職員の方が努力をすればAになる指標もあるが、なかなか努力がそのまま実を結ばない指標はBだったりする。

努力どおりであれば全てAになるはずだが、そこの悩ましさがある。Aが良くてBが悪いというよりは、Bになった指標にはどこに問題がありそうか、どういう取組みならできそうかということがしっかりと組織内で議論されて、成否はともかく改善に向けて組織的に取り組むということのほうが重要だろう。

だから、あまりA、Bにこだわらなくてもいいとは思いますが、AとBだとやっぱりAのほうがいいかなと、ついつい学校時代の成績みたいなものに縛られてしまう。

各委員の意見は、図書館自体の取組みは本当に工夫していて、図書館資料の利用ではない部分もしっかりと県民に向けて、いろんな企画を提案している点から、図書館の努力を非常に評価している、そういう理解でいる。

委員：県の広報誌「THE かがわ」には、図書館も記事を載せたりするのか。県立図書館についてPRしたことはあるのか。

事務局：最近はしていないが、今後、移転開館30周年の企画は掲載してもらおうと思っている。

委員：あれにはたくさんの読者がいるので、掲載されると話題になり、いい広報になると思う。